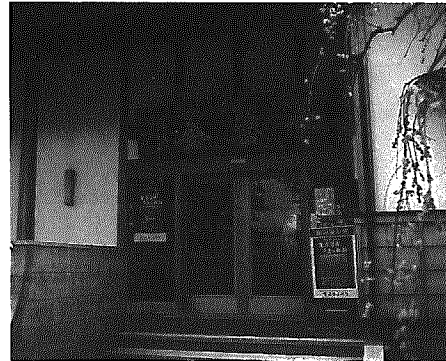
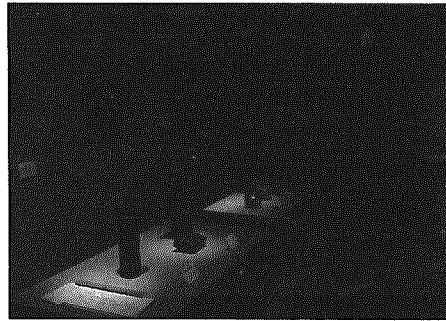


展示作品を確認する蒲舟先生



「亀倉蒲舟卒寿の軌跡」展は、5月17日(日)まで山田の雪梁舎美術館で開催しています。

蒲舟先生長男の亀倉康之氏と新大教授小磯稔氏による作品説明(開会式)



アトリエから見る金巻の池

町制施行25周年記念

亀倉蒲舟卒寿の軌跡

蒲舟先生卒寿に寄せて

宮田栄門

蒲舟先生は、明治四十年、吉田町に生まれる。まだ幼いころ、教職にあった父の黒崎村木場小学校への転任により木場に来て、小学校五年まで木場小学校に通った。そして、六年生になると大野小学校に転校。同級生の宮野佐吉さんや谷六治さん(旧姓鈴木)、村松直治郎さん、箱田重松さんらの人たちと親しく交わり、その交友関係は永く続いた。

その後、蒲舟先生は十五歳にして上京。叔父小川英鳳先生のもとで彫金の道に入った。昭和十九年、郷里黒崎への疎開までの間、東京小石川林町のアトリエで作品を製作、発表を続けてきた。東京銀座の中心街、和光や山崎貴金属店などへ作品を持参すると、「こんなに立派な作品なのに、作家名(雅号)が有ると良いのだが」と言われ、以前から密かに胸中に抱いていた『蒲舟』の雅号を昭和十四年、三十二歳の時から使い始めた。

昔から木場には、潟や池がいくつもあった。そして、幾筋もの堀が村なかを縦横に走り、農作業や生活用の小舟が行き交う、木場は西浦の水郷の里とも言われた。『蒲舟』の雅号は、前にも少し触れたが、若くして郷里を離れて以来ずっと先生の胸中にあつた懐かしい故郷木場への思い出の中から生まれた。岸辺に蒲やよしなどが繁り、池に浮かぶ一艘の小舟。こよなく自然を愛し、何時も変わらぬ静かな環境の中で仕事をしたいという先生の願いが込められている名だと思ふ。

何年ほど前になるか、こんな話を聞いたことがある。『亀倉蒲舟』、この人の名が出ると、私たちはつい誇りを感じてしまう。「うちの町に住んでいるんだよ」

浮かべ、それを眺めながら彫金の仕事をした。それは、先生あの厳格な風貌の中にも、やさしさと風流の一面を偲ばせる話である。これは知らない人が多いだろう。木場に落ちつく、地元で後進の育成を考えた蒲舟先生は、何人かの後継者を育てられ、弟子の一人に杉本信男さん(諏訪町)がいる。杉本さんは、昭和二十一年から今日まで、五十年以上、暇を見ては先生のもとを訪れている。若いころ板金関係の仕事をして、杉本さんは、先生の指導と、持ち前のねばり強さで作品を作り、県展に何回か入選している。

先生は、一つの製作が終わると、すでに次の構想を練っており、大作に当たっては何回も試作品を作って勉強を重ね、一年の時間をフルに使っておられた。年を重ねるごとに新作品への創作意欲に燃える先生は、北は北海道から南は沖縄まで、日本中を取材旅行したが、何時も御夫妻は一緒であった。また、日本の歴史、中国の歴史に精通した先生は、あこがれの中国へは四回も訪れ、取材の成果として、「龍門石窟」昭和五十七年(一九八二)、「絲綢之道(シルクロードの道)」昭和六十三年(一九八八)などの大作を発表。その後も次々と中国を題材とした製作発表を続けた。一本の線や彫るにも全神経を集中しなければならぬ厳しい彫金の仕事に、八十歳を過ぎてなお真剣に取り組んでおられる先生の姿に頭の下がる思いがした。先生はまた、「私は九十歳まで生きたが、木場の友人、東京、

黒崎町の町制施行二十五周年を記念して、「亀倉蒲舟卒寿の軌跡」の展覧会が、黒崎町、新潟日報社、雪梁舎の共催で、その開会式が四月三日午前十時から黒崎町山田の雪梁舎美術館で開催された。

開会式出席者には、河内町長をはじめ、伊藤北方文化博物館長や作家の諸先生方、その他多数の関係者の御出席により式は盛大に行われた。こうした盛大な展覧会の開会式をはじめ、体験し、今更ながら、国を代表する彫金作家で私たちの町の誇る蒲舟先生の偉大さをつくづくと感じられた。

先生の人となりについては、エピソードとして前に記したが、卒寿を迎えられてなお、お元気な先生、そして、それを支えてこられた奥さんフユ子さん。お二人の今後ますますお元気でお過ごしになられるよう、心からお祈り致します。置きます。(平成十年四月十七日筆)

私初め蒲舟先生のところへ取材に訪れたのは、今から十年ほど前のことだった。先生は当時、八十歳くらいで、元気に二十畳くらいもある広いアトリエで何かをしておられた。先生のまわりには彫金用の工具が幾種類も整然と並べられており、初めて見る有名作家の仕事場に、厳肅な感動のようなものを覚えた。先生がその時言われた言葉は今も忘れえない。

「昭和十九年、終戦疎開で黒崎に帰り、四十九年、ここ(木場)に新しく現在の住居とアトリエを建てたが、こここそ私の仕事をやる上にも、生活をするためにも最適の場所です」と、そして、「ここから望む金巻の池や、その周辺の自然の景観は、実に私の子供のころと少しも変わらぬ懐かしいもので、今でも池にパンが泳いでいたり、時には白サザの姿も見られ、夏のころには水も飛びはねる鯉やフナも見られる。この眺めが何時までも続くことを願いたい」と。これらの眺めから、これをテーマにした作品がいくつも生まれている。

数日前、また先生を訪れた時、こんな話を聞いた。それは先生の前住の住所(現在木場城公園のあたり)に居られた時のこと。アトリエのすぐ前に蓮田があった。その田を求めると池をつくり、木場川前の古物商、戸枝熊太郎さんから小舟を持って来てもらって池に

町制施行25周年記念 亀倉蒲舟 卒寿の軌跡 無料入館券 本券1枚で町民1名に限り雪梁舎美術館に無料入館できます。有効期限 平成10年5月17日(日)まで

町制施行25周年記念 亀倉蒲舟 卒寿の軌跡 無料入館券 本券1枚で町民1名に限り雪梁舎美術館に無料入館できます。有効期限 平成10年5月17日(日)まで

町制施行25周年記念 亀倉蒲舟 卒寿の軌跡 無料入館券 本券1枚で町民1名に限り雪梁舎美術館に無料入館できます。有効期限 平成10年5月17日(日)まで

町制施行25周年記念 亀倉蒲舟 卒寿の軌跡 無料入館券 本券1枚で町民1名に限り雪梁舎美術館に無料入館できます。有効期限 平成10年5月17日(日)まで

町制施行25周年記念 亀倉蒲舟 卒寿の軌跡 無料入館券 本券1枚で町民1名に限り雪梁舎美術館に無料入館できます。有効期限 平成10年5月17日(日)まで